第２５回スポーツ・ボランティア・リレートーク　レポート

２０１３年7月２６日（金）　１９時より２１時
青葉中央市民センター　第４会議室
参加者　３９　名
「夢を形に～チアとボランティアと学生の連携」
講師　　地域応援団クラップス・８９ＥＲＳチア　代表　石河　美奈　氏

【 基調講演 】　１９時～１９時４０分

自己紹介

みなさん、こんにちは、私は８９ＥＲＳやクラップスというチアリーダーの代表をしている石河です。本日は最初に３０分ほど話をさせていただき、その後、「ボランティアとチアの連携」「チアと学生の連携」「ボランティアと学生との連携」のテーマに分かれてグループワークを予定していますので、よろしくお願いします。

さて、故郷で様々なことに頑張っている人を支えたい、応援したいという思いで１９９８年に地元である福島県のいわき市にクラップスというチアを立ち上げ、スポーツ以外でもさまざまな場所で活動してきました。チアをとおして地域に関わり、多くの人と関わることはとてもやりがいがあり、生きがいにも通じるもので、現在は福島・宮城の１３の地区で３歳～73 歳のシニアまで多くのメンバーが地域応援団として活動しています。

チアとは

そもそもチアというのは「応援する、元気づける」という意味で、日本でいうチアガールという呼び方はアメリカではなく、チアリーダーと呼ばれています。そこからわかるようにアメリカでは成績が良くて、スポーツが得意で、可愛い美人で人気者という女性がチアリーダーになり、けっして踊れればいいというものではないのです。このため、私はチアリーダー教育を一種の人材教育のプログラムとして利用し、指導に力を入れています。また優しい心を育てるためにも、高齢者施設への訪問活動や、今も月一回は仮設住宅などを訪問し「元気届け隊」として、まちの応援団としてみんなに元気を届け、すべての人を笑顔にする活動を続けています。

クラップスについて。

クラップスは結成当初はスポーツの世界とは接点はありませんでしたが、やがてＪヴィレッジを拠点としていた「東京電力マリーゼ」というなでしこリーグのチームを応援することがきっかけとなり、プロスポーツと関わることによる可能性を感じ、もっと大きい舞台をもとめて仙台に移転しました。
アメリカンフットボールのチアリーダーとして活動していた現役時代に、会場の雰囲気が

大きく勝敗に影響することを実感しました。ソニー仙台の応援では客席でお客さんと一緒に盛り上げて、子どもたちにとって将来も見据えていい活動になっていると思います。

Ｆ－Ｓｔａｒｌｅｔｓは福島ユナイテッドＦＣの応援をしていますし、８９ＥＲＳチアは、お客さんに歩み寄って活動していて、全国の方にバスケットボールを楽しんでもらえるように「チームを愛する家族」の気持ちで、スポンサーフォロー（チームの営業のフォロー）・コラボパフォーマンス（あこがれの舞台で踊る）・学校訪問（ジンギスカンダンスなどで集客にもつなげる）・仮設訪問（手ぬぐい体操）などの活動をしています。そして、クラップスは「まちのチアリーダー」として、まち・チーム・ひとをつなげる役割を大切にしてきました。

共通するもの

ボランティアとチアリーダーは「支える・応援する」という意味では多くの共通点があります。ここからはグループワークで学生の皆様にもいろいろなご意見をだしていただきたいと思います。ありがとうございました。

【 グループワーク 】　１９時５０分より２０時５０分

参加者が６つのグループに分かれ、進行役と書記をきめたあと簡単な自己紹介を行い、それぞれのテーマについて活発に意見交換し、その結果をポストイットと模造紙を使用してまとめました。最後は、グループごとにポイントを発表して終わりました。

＜チアリーダーとボランティアの連携について＞

グループＡ

・チア　伊藤・稲村　・ボラ　佐藤（一）・佐藤（清）　・学生　小野寺　・菊地

検討しだされた連携の可能性を大きく４グループに分けて報告しました。

（１）　会場内での連携

※　一緒に盛り上げる取組

ゲームの中で時間を作り一緒にダンスをする

アウェイからのお客様を一緒にお見送りする

※ 連携してお客様に対応する

チアがボランティアの活動を体験する　（車いすの誘導）

一緒にチラシを配布する　（受け取ってもらいやすい）

（２） 試合前の控室

※ ボランティアとのコミュニケーション

活動前にタオル体操やストレッチを短時間一緒に行う

（３） ボランティアの開拓をチアがサポートする

※ 募集チラシをチアが配布することで、若い層にも関心が高まる可能性がある

（４） 会場外での連携

※ スタジオなどでボランティアのための運動を指導する

※ 地域への訪問活動などを一緒に行う

※ チアとボランティア合同の食事会などを行う

グループＢ

・チア　菊地、菅野　・ボラ　渡辺、江刺（文）　・川村、郷家

地域・交流・試合というキーワードでまとめて発表しました。

（１）　地域に向けての連携

※　会場周辺の美化活動での連携

※　ポスター貼りなど広報活動での連携

（２）　チアとボランティアの交流

※　シーズン後の「感謝祭」で交流する

※　御互いの情報を共有する

※　ダンス体操などを一緒に楽しむ

（３）試合の中での連携

・試合前

※ 一緒に顔合わせを行ったり準備体操をする

※ エコ活動のアピールをともに行う

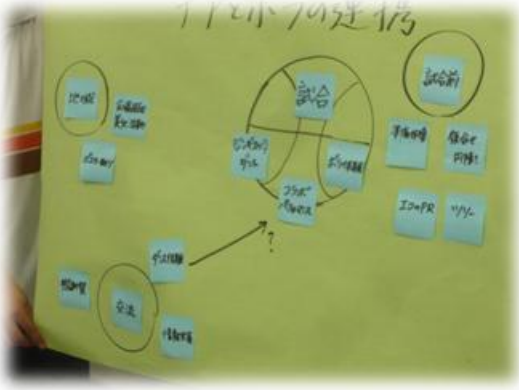
※　ペットボトルで作るツリーを制作

・試合中

※　ジンギスカンダンスを一緒に踊る

※　チアとボランティアが一緒にやるパフォーマンスを考える

※　チアがボランティア体験をする



＜チアリーダーと学生との連携について＞

グループＣ

・学生　森、川合、椎名　・チア　鈴木、手塚　・仲野、大坂、安部

大きな考え方として、チアはプロスポーツを応援し、学生はボランティアや観客としてかかわるものとしてとらえ、チアと学生の間にコミュニティを創るという提案がありました。

前段として、チアについては、踊れるだけではなくさまざまな目配りや気配りが必要であったり、社会に貢献する意識が必要という情報や、ボランティアの力は大きいが学生から見て活動が辛そうというイメージがあることが示されました。その上で、「チアと学生」にとって互いにウィンウィンの連携のために、いくつかの提案がありました。

（チアが学生に教える取組）

・立ち居振る舞いや話し方、化粧の仕方などを講義する

・こうした講義に参加することが単位取得にもつながる

・教える立場にたつことでチア自身の学びの機会ともなる

（学生がチアやチームのためにできる取組）

・チアＪｒのサポートをする

・ボランティアとして参加する

（各大学とチアの連携）

・各大学にチアと学生のサークルを作る

・学園祭にチアが参加する

・大学のチアサークルと連携する

グループD

・学生　田中、田中（利）　・チア　松川、高橋　・高橋、天野、

東北に元気を、街に元気を、というメッセージに基づき、「チアが中心となりそこに学生が連携すること」「学生が中心となりそこにチアが連携すること」「一緒にできること」の３つにまとめて発表しました。

（チアが中心となり学生が連携する取り組み）

・学園祭などの学校のイベントにチアが参加する

・チアと学校のサークルが一緒に地域を盛り上げる

・チアの活動を学生が体験する

・チアが行うダンス教室などを学生がサポート

・チアの活動について学生に知ってもらう

（学生が中心となりチアが連携する取り組み）

・トレーニングなどのチア活動を学生がサポートする

・ニュースポーツなどのレクリエーション活動をする

・学部の専門をいかした活動（健康・栄養など）を行う

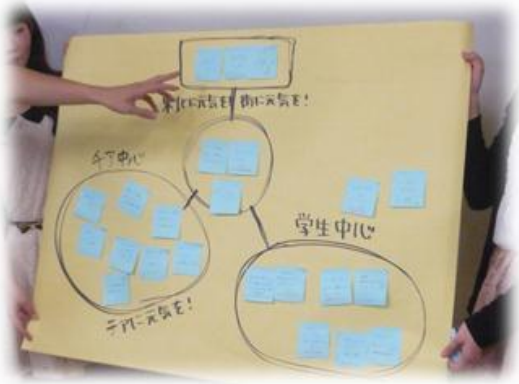
（ともに連携しておこなう取組）

・地域のおまつりなどにチアは盛り上げで、学生は支える立場で参加する

・ゲームではチアは応援で学生は救護や給水などで支援する

・チアと学生が一緒にボランティア活動に参加する

・チアリーディングの活動をより多くの人に知ってもらう取り組みを行う



＜学生とボランティアの連携について＞

グループE

・ボラ　江刺、渡部　・学生　高橋、槻山、甲賀　・小林

大きな流れとして「学生ボランティア人口の拡大」をめざし、そのために「ボランティアの紹介」を、「学園祭などで告知」することなどを中心に発表しました。

※　若い世代のボランティアが少ないという現状に対し、学生のボランティアの参加者・体験者を増やす

※そのため、まずはボランティア活動の周知を学園祭をはじめ、さまざまな場で進める
（ボランティアと学生が連携してエコステーションを運営するなど、学校にボランティアが出向く）
※インターネットなどを活用して情報を発信する
※大学の施設を使用したスポーツイベントを連携して開催する
（学生～指導者として、ボランティア～運営支援）
　こうした企画をすすめるためには、学生とボランティアをつなぐコーディネート役が必要であり、組織や人の育成が求められる。

グループＦ
・ボラ　小西、山本、榊　・学生　小松、石橋
　やはり若い世代のボランティアとして学生がかかわる事を目標とし、そのためにボランティア活動の意義を確認するとともに、実現するために情報・環境作りについて発表提案しました。
（ボランティア活動の意義）
・チームを応援しささえること
・学生からみれば社会体験の場であり、一種の就労体験にもつながる
（参加しやすい環境作り）
・スポーツボランティアの情報を入手しやすくすることが必要
・学生が参加しやすいシステム作り
⇒　ミニ体験・幅広いメニュー（選択肢）・周囲の理解の促進・活動時のサポート体制など

（文責　泉田）